



TITLE:

地域生態史の比較研究

AUTHOR(S):

市川, 光雄; 荒木, 茂; 太田, 至; 重田, 眞義; 嶋田, 義仁

CITATION:

市川, 光雄 ...[et al]. 地域生態史の比較研究. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 20: 118-124

ISSUE DATE:

1996-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187585>

RIGHT:

地域生態史の比較研究

1. 研究組織

研究代表者：市川 光雄（京都大学アフリカ地域研究センター・助教授）

研究分担者：荒木 茂（京都大学アフリカ地域研究センター・助教授）

太田 至（京都大学アフリカ地域研究センター・助教授）

重田 眞義（京都大学アフリカ地域研究センター・助手）

嶋田 義仁（静岡大学人文学部・教授）

2. 研究のねらい・目的

近年、自然と人為の相互作用に関する生態史的な関心が高まっているが、有史以来、さまざまな環境変遷を遂げてきたアフリカ大陸に関しても、これはとりわけ魅力的な研究テーマのひとつである。サハラを南北を結ぶ交易ルートの消長や、10世紀以降サヘル地域に出現したいくつかの帝国の興亡、さらにはバントゥー・エクスパンションとして知られる民族の大移動も、地域の環境や生活の変化にかかわる生態史的な現象として理解できよう。

本研究では、このような観点から、人間活動と自然の相互作用の歴史としての地域の生態史を再構成し、地域の生態環境と固有文化の関係、それらと外文明との相互関係を検討する。また、主として熱帯アフリカの諸地域の景観や生業、国家形成等の生態史的な位置づけと相互の比較を通して、地域の特性を生態史的に把握するとともに、そのような生態史記述の単位としての「地域」概念の妥当性を検討する。

研究代表者及び分担者はいずれも、これまで長年にわたって生態人類学及び文化人類学的な現地調査に携わる一方で、東南アジアとアフリカの地域間比較や、衛星データ等を用いた新しい地域研究の方法論に関する検討を行ってきた。本研究では、従来の現地調査と文献研究に加えて、このような新しい方法による地域研究の開拓を試みる。

3. 平成7年度の研究経過

第1回研究会：6月20日(火) 於：京都大学アフリカ地域研究センター

「地域生態と王国形成：アフリカ・カメルーン・バムン伝統王国における環境の解釈と再解釈」

話題提供：和崎春日(日本女子大学)

第2回研究会：7月18日(火) 於：京都大学アフリカ地域研究センター

「西アフリカの歴史地域構造」

話題提供：嶋田義仁(静岡大学)

第3回研究会：平成8年2月24(土)～25日(日) 於：芝蘭会館(京都)

「地域間研究の構図(4)：東南アジアとアフリカ」

話題提供：「スワヒリ世界の成立と展開」(東京外国語大学・日野舜也)

コメント：高谷好一(滋賀県立大学)

「サヘルの歴史地域構造」(静岡大学・嶋田義人)

コメント：古川久雄(京都大学)

「内陸アフリカの論理」(京都大学・市川光雄、掛谷 誠)

コメント：山田 勇(京都大学)

総合討論 司会：立本成文、掛谷 誠

平成7年度には、これらの研究会及び研究集会のほかに、以下のような研究活動をおこなった。

市川は、紀元前1万年前頃から始まり、中央アフリカ一帯に広がった湖沼文化(後期石器時代)の発達や、同じ地域で発達し、ソルガムやトウジンビエなどの多くのアフリカ独自の作物を生んだスーダン型雑穀栽培農耕文化の起源について検討した。また、鉄器製作やバントゥー系農耕民の広範な移動と森林地帯への移住、アジア起源の作物の導入など、多くのアフリカの文化・社会の特徴が形成された後期先史時代に関する生態史的な検討をおこなった。

荒木は、東部及び南部アフリカ一帯に広がるミオンボ疎開林における農耕システムを検討し、移動を伴う農耕活動や居住様式がこの地域の生態環境に及ぼした影響を、衛星データや航空写真と、地上での観察結果を対照させることによって解析した。

太田は、東南部アフリカのサバンナ地帯の代表的な生業である遊牧について、その成立機構を人間と家畜の相互作用という観点から検討をおこなった。

重田は、エチオピア高地のエンセーテ栽培を中心とする独特の農耕文化の成立機構について、人とエンセーテとの相互関係という観点から検討したほか、遺伝子源供給地としての野生種自生地の儀礼的保護の重要性について指摘している。

嶋田は、19世紀末のいわゆる「フルベ族の聖戦」において、中央アフリカのサバンナ及びそ

の周辺域に成立したイスラム国家が、どのような生態的、社会的条件のもとで形成され、またそうした地域的特殊性をどのように乗り越えることによって普遍化し、地域的にも拡大していったのかという点についての検討をおこなった。

また、第1回の研究会において、カメルーン西部のバムン王国の成立とその歴史的展開を分析した和崎は、この王国がヤシ酒やラフィアヤシ等の地域の生態的条件に深く根ざした文化と統治システムを築き上げる一方で、イスラム教を導入する過程で、いかにイスラムの要求する普遍的な基準を満たしつつ、同時にバムンのオリジナルな王権とその文化を維持していったのかという点に関して興味深い分析をおこなった。

さらに、カメルーンをはじめ、ニジェール、マリなどのいわゆるスーダン・サヘル及びサバンナ地域において研究をつづけてきた嶋田は、上記の研究会において、西アフリカの歴史地域構造に関して、以下のような指摘をおこなっている。

嶋田によれば、この地域の歴史は、南北及び東西の地域構造を考えるとよく理解できる。すなわち、西アフリカはまず、歴史的に豊かであった北部サバンナ・スーダン地帯と、相対的に貧しかった南部のギニア・熱帯雨林地帯に分けられる。北部地域には、トウジンビエやソルガムを中心とする雑穀栽培とウシ、ヒツジ、ヤギ等の牧畜が発達し、相対的に豊かであった。しかし南部の湿潤地帯では、根菜類の栽培が中心であったために、蛋白質不足などの栄養障害が大きな問題となっていた。また、北部乾燥地帯は、サハラ横断交易の影響を受けて、商業や衣服・染色などの工芸文化が発達するなど、第2次、第3次生産においても活発であり、そのような背景のもとでサヘル地帯には、ジェンネなどの交易都市やマリ帝国などの大規模イスラム国家の形成が促された。

ところがこうした南北の差は、大西洋岸へのヨーロッパ人の到来とその後の植民地化によって逆転した。大西洋岸一帯は、ヨーロッパ人中心の海洋交易や植民地経営の拠点となり、熱帯プランテーション農業が発達したからである。これに対して北部地域は、サハラ横断交易の衰退や「砂漠化」の影響を受けて、現在では世界の最貧地帯になっている。

嶋田によれば、これと類似した地域間の対照とその逆転現象が、西アフリカの東西構造についても見られる。サハラ横断交易の影響は、東部よりも西部において大きかったが、これには西部に金という世界的な交易品が存在したことのほかに、サハラ横断の容易さやニジェール川の水運、この地域の北側に位置するマグレブの都市文化の存在などの要因があげられる。しかし交流が活発で栄えた分だけ、この地域は政治的に不安定な状態にあった。植民地化に際しても、西アフリカの方が、いち早くヨーロッパ列強に屈することになった。これに対して

東部地域は、比較的自律的な歴史を歩み、11世紀に成立したカネム王国などはその名をボルヌ王国と変えながらも20世紀直前まで存続した。この地域はまた、大西洋岸から離れていたために、ヨーロッパの影響を受けることも少なかった。そのため、火器の導入が遅れ、ヨーロッパ軍が侵入してきたときもほとんど戦わずして降伏したが、その代わりに伝統国家を存続させることができた。現在、西アフリカで安定した発展を遂げているのは、むしろこうした伝統的国家の存続地である。

以上のような研究活動のほかに、平成7年度には「東南アジアとアフリカ」の地域間比較のための研究会が開催された。高谷が東南アジア地域などにおける研究を踏まえて提出した「世界単位」論が、アフリカの地域にも適用可能であるか否かを検討することが研究会開催の主目的であった。このためアフリカから、東南アジアの海域世界に相当する「ネットワーク社会」としてインド洋沿岸部のスワヒリ世界、東南アジア大陸山地部に見られるような「生態論理の卓越する世界」として内陸アフリカ地域、そして大文明との接触の影響が著しい地域としてスーダン・サヘルを選んで、それぞれ東南アジアとの比較を試みた。

4. 研究の成果とフロンティア

上記の研究活動の項にあげたように、平成7年度は個々の地域における生態史の検討を主に起こったが、その結果、次のような点が明らかにされた。

まず、アフリカの歴史の理解にあたっては、とくに生態環境と人間活動の相互作用に関する理解が不可欠である。このことは、人間の文化や社会のあり方に生態的な環境の影響を読みとることと同時に、生態環境のなかにも人間活動の足跡を読むことを意味する。アフリカの多くの地域で近年、原生的な自然の破壊や変容が急速に進んでいるが、環境に対する人為の影響は先史時代にも遡ることができるのである。ただし、そのような歴史的な人為の影響はアフリカの環境にとっては決して壊滅的なものではなかった点に注意する必要がある。地域によっては、そうした相互作用を通じて、地域の生態環境が人間にとってより住みやすい環境に変わってきたという例も存在する。

また、アフリカの地域区分に関しては、従来から同心円状に展開する生態ゾーンとそれぞれのゾーンで繰り返されている特徴的な生活様式の存在が強調されてきた。アフリカが「同心円の大陸」と形容されるゆえんであるが、最近の先史生態学及び歴史生態学的な研究によれば、むしろ、アフリカの環境は、先史以来何度も乾燥化と湿潤化を繰り返してきたことが明らかにされている。そのような環境変動との関連において、アフリカにおける農耕起源や生業変化、

人口移動、王国の形成や衰退、交易活動の分布と消長などの生態史的な現象を検討する必要がある。すなわち、アフリカにおいては、歴史の舞台である生態基盤は決して不変・不動のものではなく、自然的、人為的な要因によって変動してきたのであり、アフリカにおける歴史のあゆみは、こうした環境変動と関連させながら検討する必要がある。言い換えればアフリカでは、地域性の基盤であり、歴史記述の単位ともなりうるような固定した地域単位の設定が困難という事情が存在する。

また、アフリカでは、かりに生態的な区分が可能であったとしても、これまでに人間や文化がそれを越えて頻繁に移動してきた。その端的な例を、紀元前1千年紀から約1000～1500年の間に西アフリカから東アフリカまで、直線距離にして4000キロメートルもの距離を移動したバントゥー系住民の拡散にみることができる。現在では、サハラ以南のアフリカの広大な地域に分布するバントゥー系住民は、半砂漠からサバンナ、疎開林、熱帯雨林、スワンプ、高地ときわめて多様な生態系にわたって分布し、その生業もサバンナ型の雑穀栽培農耕から、森林型の根菜栽培農耕、牧畜、漁撈、狩猟と、きわめて多岐にわたっている。また伝統的な政治組織も、村落単位の離散的な生活を営むグループから首長国を形成したグループまで、変異が大きい。それにもかかわらず、これらのバントゥー系住民は、互いにきわめて近縁な言語を話し、超自然的な存在をめぐる観念など、文化的に多くの特徴を共有する人びとである。

以上のような事情を考えれば、固定的な生態区分を設定し、それにもとづいた静態的な地域単位を考えることが、アフリカの地域性を理解するのにどこまで有効であるかは疑問である。

本年度の成果としては、これらのほかに方法論的な側面もあげられる。従来の地域研究においては、現地調査による事象の観察と文献研究との統合が試みられてきたが、本研究では、これらに加えて、人工衛星による画像データの解析を利用する方法が試みられた。現場でのミクロな人間活動の観察と衛星などによるマクロな環境把握を結合するこの方法は、とくに地域の生態史を解析するのに有効であろう。

5. 今後の課題

今後の課題としては、これまで研究者が個別に検討してきた地域の生態史を相互に比較対照させることである。また、そうした作業を通して、生態史という観点からみたアフリカの諸地域の特徴を把握することである。

さらにそうした成果に基づいて、他地域とくに東南アジア等の例と比較検討し、アフリカの地域としての特徴を抽出することであろう。高谷は世界単位を「生態が卓越する地域」、「ネ

ネットワーク型の地域」、「文明の支配的な地域」に分けている。この分類にしたがえば、内陸アフリカは「生態が卓越する地域」ということになるが、ここでは東南アジアとは異なり、必ずしも生態環境に応じたそれぞれに異なった固有の文化が見られるわけではない。バントゥー系住民についてみたように、きわめて異なった生態環境に、きわめてよく似た文化をもつ人びとが生活する。その一方で、同様な生態環境の中にさまざまな文化的背景を有する人びとが共存しているのが、この地域の実情である。このようなアフリカの実態を把握するには、静態的で同質的な地域区分を設けるよりも、「変動」、「移動」、「異質性」「流動」などの側面から検討を加えることが有効ではないだろうか。

さらに、本研究ではランドサットなどの衛星データを用いた地域分析の方法を試みたが、このような新しい方法をさらに広く、地域の社会や歴史の理解に活用することも今後の課題であろう。

6. メンバーの研究業績（平成7年度発表分）

市川光雄

「狩猟採集社会における道具使用・協業・分配」『霊長類研究』11: 231-238, 1995.

「ムブティ・ピグミーの子どもたち」恩賜財団母子愛育会編『子育て万華鏡』メディサイエンス社, pp. 81-86.

「アフリカのヤシ酒」吉田集而・山本紀夫編『酒をつくる植物』（埴狼星と共著）、八坂書房, pp. 111-118.

『生態人類学を学ぶ人のために』（秋道智彌、大塚柳太郎と共編著）、世界思想社, pp. 275, 1995.

「開発・保護と地域」『総合的地域研究成果報告書シリーズ』10: 22-32, 1996.

"Cultural Diversity in the Use of Plants by the Mbuti Hunter-gatherers in Northeastern Zaire: An Ethnobotanical Approach." (Co-authored with H. Terashima). In *Cultural Diversity among Twentieth-century Foragers*, ed. by Kent, S., Cambridge University Press, pp. 276-293, 1996.

「文化の変異と社会統合」田中・掛谷・市川・太田編『続・自然社会の人類学』アカデミア出版会, 1996.

荒木 茂

「土と焼畑の自然誌」田中・掛谷・市川・太田編『続・自然社会の人類学』アカデミア出版会, 1996.

太田 至

「家畜の群れ管理における自然と文化の接点」福井勝義編『地球に生きる：第4巻』雄山閣出版，
pp. 193-224, 1995.

「規則と折衝」田中・掛谷・市川・太田編『続・自然社会の人類学』アカデミア出版会，1996.

重田真義

「品種の創出と維持をめぐるヒトー植物関係」福井勝義編『地球に生きる：第4巻』雄山閣出版，
pp. 143-164, 1995.

嶋田義仁

『牧畜イスラーム国家の人類学』世界思想社，pp. 299, 1995.

『日本』勁草書房，pp. 51-76, 1995.